言葉の“あや”の印象[1)]

――“あや”に関わる形容語尺度の分類――

北海道大学　佐　山　　公　一[2)]

日常的な会話のやりとりから文学作品や広告コピー文に至るまで，我々は毎日おびただしい数の発話を読んだり聞いたりしている．そして，しばしばそれらの表現中に言葉の“あや”を感じとったりする．次の例を見てもらいたい．

(1) 人間は考える葦である．

(1)の表現を読んで，我々は直観的にその表現に“あや”を感じとることができる．では，この“あや”とは具体的にどのような心理印象をいうのであろうか．

従来，“あや”のある表現，いうならば修辞的表現に対する心理印象についての研究はほとんど行われておらず，それゆえその方法論も判然としない．どのようにすれば言葉の“あや”というものを心理学的に捉えることができるのであろうか．一般に，心理印象に関する研究ではいわゆる形容語尺度を用いた評定実験が行われてきている．“あや”も何らかの心的活動の結果もたらされるものであるから，“あや”に対しても形容語尺度による印象評定データを得ることができれば，そこからその心理的構成因子を見つけることができるかもしれない．ただ，その前に行っておかなければならないことがある．それは，言葉の“あや”の印象を評定するための形容語尺度としてどのようなものを用意しておけばよいのかを決めておくということである．そこで，本研究では言葉の“あや”に関わると思われる形容語尺度を数多く選択しておき，それらをより少数のグループに分類してみることにする．また，可能ならば，分類された各グループが“あや”の何らかの特徴的な側面を反映しているかどうかを考察してみることにする．

一口に“あや”と言っても一つの発話を読んで受ける心理印象は多様である．実際，(1)の例

---

1) Impressions of figurative speech: A classification of adjectives expressing the figurativeness of utterances.
by Kohichi Sayama(Department of Behavioral Science, Hokkaido University)

2) 論文作成にあたり，北海道大学文学部阿部純一助教授の御指導を賜りました．また，あわせて釧路公立大学金子康朗講師の御助言をいただきました．ここに記して謝意を表します．

から受ける“あや”を言葉で説明しようするのは難しい．一方，“あや”をもたらす発話自体にも様々な種類があり得る．そしてこのことによっても“あや”という心理印象はさらに多種多様になると考えられる．“あや”が多種多様であるならば，それをもたらす心理的要因も多種多様であるかもしれない．それゆえ，印象評定実験を行うにあたっては以下の点に留意する必要がある．印象評定のための形容語尺度は可能な限り緩い制約の中で選定し，かつ，“あや”をもたらすと考えられる発話もなるべく多く収集しておく．本研究では，分類対象となる形容語尺度を数多く選び，また，できるだけ多種多様な“あや”のある表現，すなわち修辞的発話を対象とすることにする．

ところで，一般に何らかの発話を行うとき，話し手または書き手（以下，話者と呼ぶ）はこれから何を話す（書く）かすなわち発話の内容と，その発話内容をどのように話す（書く）かすなわち発話の形式とを選択する必要がある（阿部，1987; Clark & Clark，1977; 桃内，1988）．たとえ同じことがらを話すにしても，どのような語彙と統語形式を選択するかによって，すなわち話者の発話形式の選択の仕方によって，聞き手または読み手（以下，聴者）の受ける印象は変わる．もちろん，発話形式の選択は話者が発話を産出するときに行うことであり，聴者が理解に際して行うことではない．しかし，聴者は同時に話者にもなり得るため，話者が選択した発話形式そのものに対しても何らかの判断を下し得ることが考えられる（金子・佐山・阿部，1986）．一例として緩叙法（litotes，understatement）と呼ばれる“あや”のある表現を考えてみよう．

(2) 難しいがその方法でもやれなくはない．

(2)において，「やれなくはない」という表現を，「やれる」に置きかえても，伝えたいこと自体に大きな変化はない．しかし，明らかに前者の言い方の方が後者よりも修辞的な効果を聴者に与える．このように，伝えようとしている命題内容はおおむね同じでも，発話形式が変わると受ける印象も変わってくる．このことは，聴者が話者の採った発話形式に対して何らかの評価を下し得るということを示唆している．

そこで，本研究では２種類の評定実験を行うことにした．第一の評定は，“一般的印象”すなわち発話を読んで直接受け取る全体的印象についてである．第二の評定は，“技巧的印象”すなわち言葉の使い方または意図や命題内容の伝え方に対する印象についてであり，それらには例えば，字面の印象や音韻列に対する印象なども含まれる．言語処理の結果としてもたらされる言葉の“あや”の心理印象を，これら二つの側面から検討し，それぞれにあり得る心理的構成因子を考察するとともに，両側面の間の関係をも考えてみることにした．

方法

被験者

被験者は北海道大学文学部学生22名であった．

材料

印象評定の対象として“修辞的”と思われる言語表現を57例選択した．その際，“あや”のある表現をできるだけ幅広く捉えられるよう配慮し，そのような表現を多く含んでいると思われる文学作品や広告コピー文集などの中から選択するようにした．なお，付録に選択した全57例を挙げてある．

評定のための尺度には形容語尺度を50対用意した（図１および図２に全尺度が示されている）．形容語尺度は次のようにして作成した．まず，修辞に関する文献２冊（佐藤，1978，1981）から，修辞的発話に関係があると思われるすべての形容語を抜き出した．さらにその中で互いに類義語や反対語の関係になく，しかも発話を読んで得られる多くの心理印象を判定できると思われるもの50語を選択した．そして各語についてその反対語を考え，50対の形容語尺度を作った．

形容語尺度はいずれも７段階尺度とした．目盛りの内容は，例えば「美しい－醜い」という尺度であれば，順に美しい，かなり美しい，やや美しい，どちらでもない（またはどちらともいえない），やや醜い，かなり醜い，醜い，とした．

実験材料は２部の小冊子からなる．一方は，ある発話を読んだ際にその発話から受ける“一般的印象”を評定するためのものであり，他方は“技巧的印象”を評定するためのものであった．いずれの小冊子とも57ページあり，各小冊子の各ページには，57の修辞表現例の中のいずれか一つと50個の形容語尺度が印刷されていた．形容語尺度の向きと配列順序は冊子中の各ページごとに変え，ランダムにした．

手続き

各被験者は，読解後の“一般的印象”および表現上の“技巧的印象”の評定のための小冊子２冊を手渡され，以下の教示を受ける．まず，“一般的印象”の評定では57の発話例のそれぞれが与える直接的で全体的な心理的印象を評定するように求められる．被験者はページごとに記されている修辞的発話一例を読み，それに対する素朴な印象を50の形容語尺度すべてについて評定しなければならない．

一方，“技巧的印象”の評定では“一般的印象”と同じ57の発話例それぞれに対して，表現上の技巧に注目し言葉の使い方および意図や命題内容の伝え方を評定するように求められる．“一般的印象”同様，各ページに記されている修辞的発話一例を読み，その表現上の技巧についてどのような印象を受けるかを50の形容語尺度すべてについて評定しなければならない．

被験者は，“一般的印象”の側面の評定から始め，続いて“技巧的印象”の側面の評定を行

う．その際，それぞれの側面の小冊子中の各発話例の各形容語尺度に対し，第一印象や直観的判断だけで答えるよう，かつ，上から順に，尺度どうしは互いに無関係とみなしてして評定するよう求められる．また，評定の際の制限時間は特に課されない．

結果と考察

57種の修辞的発話例のうち，一つの発話例に対する反応結果は，反応用紙の一部に不備があったため分析から除いた．したがって各被験者につき56（修辞的発話例の数）×50（形容語尺度の数）の素データ行列２種が上の手続きにより得られた．素データ行列２種のうち，一方は“一般的印象”について，他方は“技巧的印象”についてのものであった．本稿では，形容語尺度の分類を行い，言葉の“あや”の印象の分析を試みた．

分析方法には分岐型クラスター分析 VARCLUS を用いた．VARCLUS は，主成分分析を応用したものであり（Harman, 1976; Sarle, 1985），変量の数を減らし対象をより簡潔に記述するのにもっとも有効な手段の一つである．特に，この手法は多数のしかも意味上互いに似かよったところのある変量群のグループ分けに適していると考えられる（Sarle, 1985）．

分析では以下に述べる同一の手続きが繰り返された．手続きは，分割されるクラスターの決定とその分割とからなっている．始めは全形容語尺度が一つのクラスターとみなされ二つに分割される．その後，複数のクラスターのうちのいずれか一つが選ばれ分割され続ける．分割されるクラスターは次のようにして決められる．すなわち，クラスター内の形容語尺度間の相関行列に対する固有値の中で二番目に大きな固有値を，その時点で存在する全クラスター間で比較し，最も大きな第二の固有値をもったクラスターが選択される．一つのクラスターが選択された後，その中の各形容語尺度が，そのクラスターの第一，第二の固有値に対応する二つの主成分の中でその形容語尺度との相関の高い方に割り当てられる（Anderberg, 1973; Sarle, 1985）[3]．全分析はいずれかのクラスターの第二の固有値の中に１以上のものがなくなった時点で終了する[4]．

クラスターの解釈

図１には“一般的印象”に関するクラスター分析の結果が，図２には“技巧的印象”に関するクラスター分析の結果が示されている．最終的なクラスター数は“一般的印象”が11，“技

---

[3] 厳密に言えば，各形容語尺度は，NCS（Nearest Component Sorting; Anderberg, 1973 および Sarle, 1985 を見てほしい）アルゴリズムに従ってまず，いずれかの主成分へ割り当てられ，すべての割当が終了したのち，相関の高い成分に正しく割り当てられたかどうかがチェックされる．

[4] クラスターの分割は各分析段階どうしが階層的になるように行われた．

巧的印象”は13であった．各図とも形容語尺度はクラスターごとに以下の順序で上から下へ並べられている．すなわち，クラスター内の形容語尺度間の相関がすべて正になるように，かつ，形容語尺度と当該クラスターとの相関の高い順に揃えられている．

以下，それぞれの分析についてクラスターのまとまりがよいと思われる分析段階を適宜選び，そのレベルの各クラスターの解釈を試みた．図１の“一般的印象”ではクラスター数８のレベルのクラスターを解釈した．最上段から順に，「知的洗練性」，「独創性」，「複雑性」，「わざとらしさ」，「愉快性」，「攻撃性」，「親近性」，「具体性」と名づけた．一方，図２の“技巧的印象”ではクラスター数９のレベルのクラスターを解釈した．いくつかのクラスターには“一般的印象”の中のクラスターと同じ解釈を与えた．各クラスターは，上から順に，「知的洗練性」，「複雑性」，「論理性」，「的確性」，「わざとらしさ」，「愉快性」，「攻撃性」，「親近性」，「具体性」と解釈した．

“一般的印象”と“技巧的印象”の類似性

図１の“一般的印象”の結果と図２の“技巧的印象”の結果とを比べると，“一般的印象”のクラスターの尺度群と“技巧的印象”のそれらとはかなり共通していることが分かる．もとより“一般的印象”は“技巧的印象”を含んでいるとも考えられる．すなわち，発話例の中には，その発話形式から受ける印象が強いために，被験者が“一般的印象”を求められたときにも主としてその印象で判断する場合もあったと考えられる．そのように推測するなら，“一般的印象”のクラスターの尺度群と“技巧的印象”のそれとの間の結果の類似は当然ともいえる．

実際，同一の解釈を与えられたクラスターどうしは互いに共通した尺度群を多く含み，それゆえ対応しあっているように思われる．すなわち“一般的印象”，“技巧的印象”それぞれの「知的洗練性」，「複雑性」，「わざとらしさ」，「愉快性」，「攻撃性」，「親近性」のクラスターがそれである．

“一般的印象”と“技巧的印象”とは，ともに大きく二つのクラスター群に分かれる点でも共通している．すなわち，“一般的印象”では，「知的洗練性」，「独創性」，「複雑性」，「わざとらしさ」を含む群と「愉快性」，「攻撃性」，「親近性」，「具体性」を含む群とに大別され，“技巧的印象”では，「知的洗練性」，「複雑性」，「論理性」，「的確性」，「わざとらしさ」を含む群と，「愉快性」，「攻撃性」，「親近性」，「具体性」を含む群とに分かれる．

クラスターの性格

図１および図２の上部に記されているクラスター群，すなわち，“一般的印象”における「知的洗練性」，「独創性」，「複雑性」，「わざとらしさ」と“技巧的印象”における「知的洗練性」，「複雑性」，「論理性」，「的確性」，「わざとらしさ」のクラスターは，ごく大ざっぱにいって，発話に対する，知的・理性的な側面での印象評定に関わる尺度群を含むと考えられる．これに対し両図の下部に記されているクラスター，すなわち，「愉快性」，

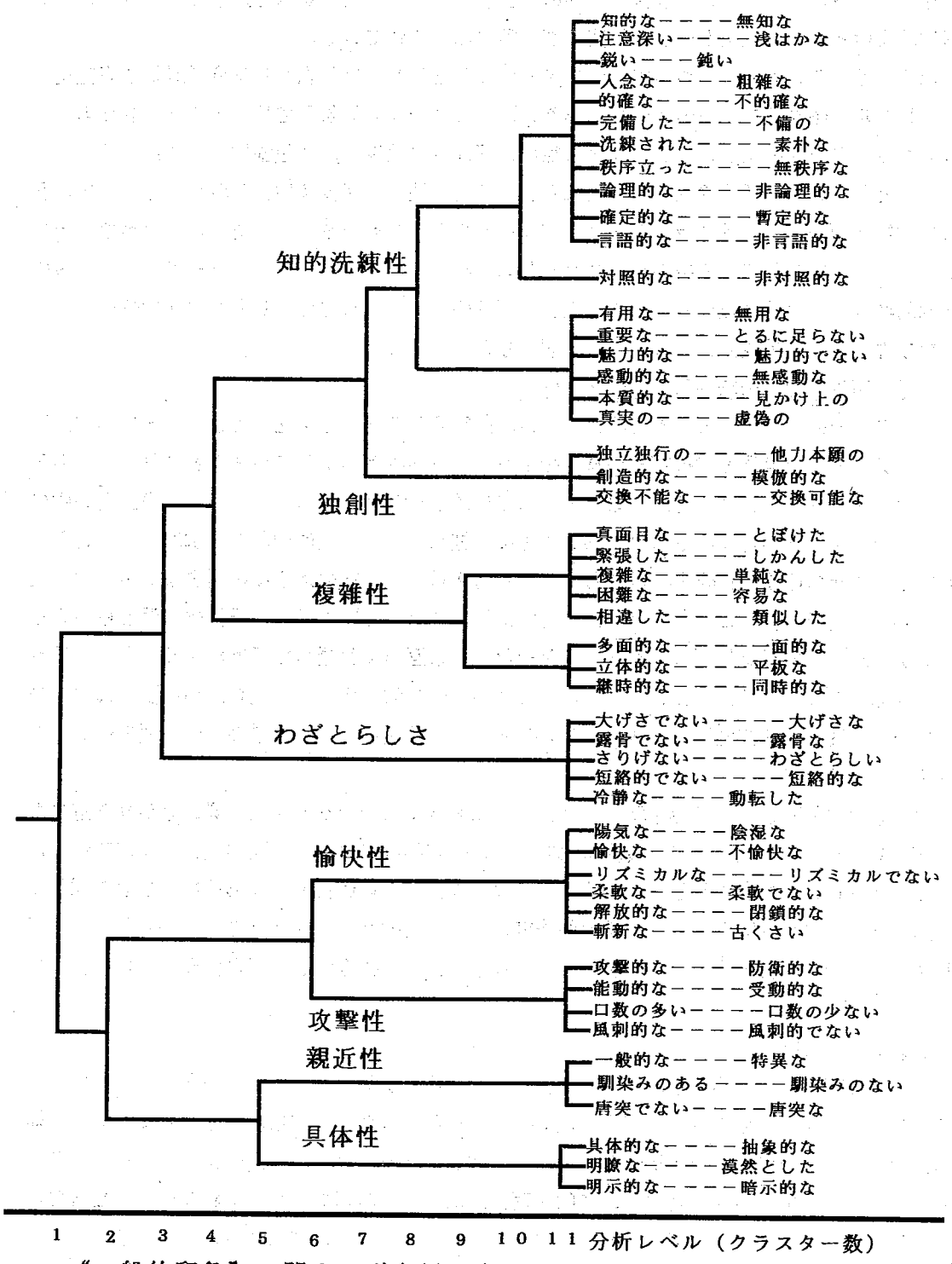

図１．“一般的印象”に関する形容語尺度のクラスター分析．

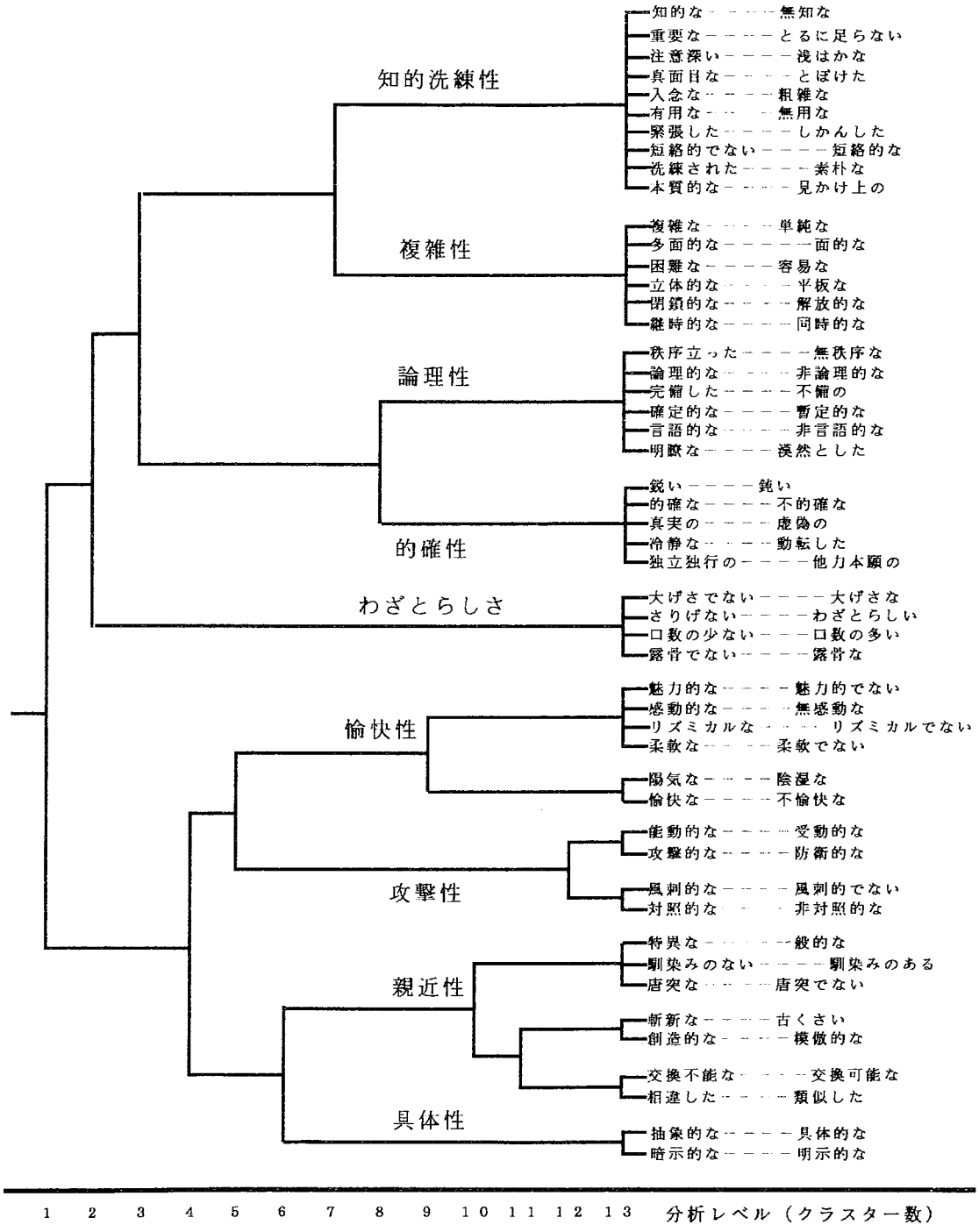

図２．“技巧的印象”に関する形容語尺度のクラスター分析．

「攻撃性」，「親近性」，「具体性」のクラスターは，発話に対する，情動的な側面での印象評定に関わる尺度群を含むと見なせるかもしれない．

ただし，どちらのクラスター群に属する尺度であれ，個々の形容語尺度が反映させる発話の側面は，ある特定の側面あるいは層に限られるというわけではなさそうである．例えば，「知的な－無知な」という尺度上に表れる評定値は，発話に用いられた語彙や表現形式に依存して決まる場合もあるであろうし（例えば，難解な単語や統語形式を用いた場合），その話題（例えば，量子力学についての発話の場合）や登場人物（例えば，発話に高名な哲学者が登場するような場合）だけで決まる場合もあるであろう．つまり，聴者が発話から受ける印象は，いろいろな面，いろいろな層から来るということであり，その面・層としては，話者，話題，登場人物，等々が考えられるということである．

結局，本結果から確認できることは，今後，修辞的発話に対する印象評定を求める際には，大きくいって，知的・理性的側面に敏感な尺度と情動的側面に敏感な尺度の両者を必ず用意すべきということと，できるならば，図１と図２とに示されるような８，９種類の尺度をバランスよく用意すべきということである．また，推測できることは，それら８，９種類のクラスターのそれぞれを性格づける特徴が，“言葉のあや”を構成する心理的因子として解釈できる可能性がある，ということであろう．

一般的考察

“一般的印象”（図１），“技巧的印象”（図２）の各クラスター群に対して与えた諸解釈は，人が“あや”のある表現を読んで抱く様々な日常的印象を総括・分類し，それぞれに直観的な説明を与えたものとなっている．しかし，むろんこの程度の簡単な説明では十分とは言いがたい．“あや”の印象とは何かを説明するためには，例えば，なぜ人はわざわざ“あや”のある表現を用いて意思を伝え合うことをするのか，あるいは，言語の理解や産出のどのようなプロセスの中で“あや”の印象がもたらされるのかなどといった問題に答えられなくてはならない．以下では，本研究結果を過去の研究結果と比較することにより，各クラスターに対する解釈にさらなる考察を加え，そのような問題の解決への手がかりとしたいと思う．

Ortony, Clore, and Foss(1987)は，過去の研究者たちによって情動（affect, emotion）を表わすと判断された単語（以下，情動研究材料語と呼ぶ）を集め，各単語が文脈中で具体的にどのような対象を指示するかを分析し，それらを，それらが指示する状況の種類ごとに，数カテゴリーに分類した．彼らの分類を表１に示す．

彼らによれば，情動研究材料語はまず「外的状況（external conditions）」を指示するものと「内的状況（internal conditions）」を指示するものとに大別される．「外的状況」とは，聴者や登場人物の態度など何らかの外界の対象のことをいう．さらに，「外的状況」を指示す

るとされた単語は，情動的含意の有無，すなわち，話者の情動を含意するか否かによって区別される．情動的含意をもつ単語は「主観的評価（subjective evaluations）」と呼ばれ，それを含まない単語は「客観的記述（objective descriptions）」と呼ばれる．一方，「内的状況」を指示するとされた情動研究材料語は，話者自身あるいは話者からみた登場人物の状況などを指示する．これらはさらに「肉体的・身体的状況（physical and bodily states）」を指示するものと「心的状況」を指示するものとに分けられる．

「心的状況」の情動研究材料語は，情動状況（affective conditions），認知状況（cognitive conditions），行動状況（behavioral conditions）（これら３種の状況の区別についての詳細は，Hilgard(1980)を参照してほしい）のうちのいずれを指示するかの相違により，情動状況のみを指示する「情動状態（affective states）」，情動状況と行動状況を同時に指示する「情動－行動状況（affective-behavioral conditions）」，情動状況と認知状況を指示する「情動－認知状況（affective-cognitive conditions）」，行動状況と認知状況とを指示する「行動－認知状況（behavioral-cognitive conditions）」，および，認知状況のみを指示する「認知状況（cognitive conditions）」とに分けられる．全カテゴリーのうち，話者の情動状況を指示する，すなわち，話者の情動を表現していると彼らによって判断された単語のグループは，「情動状態」，「情動－行動状況」，「情動－認知状況」のカテゴリーのみである．

情動状況への指示に関する彼らの判断は，主観的ではあるが直観的に受け入れることができるものである．例えば，表１の中で“alone”は“一人でいる”という「客観的記述」であり情動状況は指示しない．これに対し“lonely”は“ひとりぼっちで寂しい”という話者や登場人物の情動状況を指示する．

本研究で使われた形容語のいくつかは，彼らの集めた情動研究材料語中に含まれていた．双方の研究に共通する単語と，それらの属する“一般的印象”，“技巧的印象”の各クラスター，および，Ortony, Clore, and Foss(1987)のカテゴリーとを表２に示す．この表から，本研究結果のクラスターと，Ortony, Clore, and Foss(1987)のカテゴリーとを以下のように対応づけることができそうである．

まず，“一般的印象”とOrtony, Clore, and Foss(1987)のカテゴリーとを比較すると，“一般的印象”において知的・理性的側面とされた単語は，「しかんした（phychologically relaxed）」を除けば，Ortony, Clore, and Foss(1987)のカテゴリー中で，直接情動状況を指示しないとされた「行動－認知状況」，「主観的評価」，「認知状況」の各カテゴリーに該当している．このことから，本研究結果において知的・理性的側面と解釈された形容語の多くは，Ortony, Clore, and Foss(1987)においても情動状況を指示しないと推察される．

また，“一般的印象”の「愉快性」は，Ortony, Clore, and Foss(1987)の「情動状態」に含まれる．このことから，「愉快性」と「情動状態」との対応が示唆される．表１に示すように，「情動状態」は「嬉しい（glad）」や「悲しみ（sorrow）」のような比較的単純で日常頻繁に

表1
Ortony, Clore, and Foss(1987)による情動研究材料語の指示対象の分類

情動研究材料語の指示対象	単語の具体例
external conditions （外的状況）	
objective descriptions （客観的記述）	abandon, alone, cheated, defeated, ignored, lucky, powerful, successful, など
subjective evaluations （主観的評価）	good, hopeless, horrible, inferior, ridiculous, strange, trustworthy, wonerful, など
internal conditions （内的状況）	
physical and bodily states （肉体的・身体的状態）	dizzy, feverish, hungry, ill, pain, refreshed, sleepy, tired, など
mental conditions （心的状況）	
affective states （情動状態）	afraid, angry, anxious, glad, lonely, love, miserable, sorrow, など
affective-bahavioral conditions （情動－行動状況）	cowardly, gleeful, jubilant, kind, mournful, shy, tender, triumphant, など
affective-cognitive conditions （情動－認知状況）	amused, desire, empathy, encouraged, intimate, optimistic, peaceful, troubled, など
cognitive conditions （認知状況）	accept, certain, confused, curious, doubtful, inspired, interested, surprised, など
behavioral-cognitive conditions （行動－認知状況）	bold, careful, competitive, crazy, critical, friendly, lazy, stubborn, など

表2
本研究で用いられた形容語とOrtony, Clore, and Foss(1987)で扱われた情動研究材料語との対応

本研究の形容語[a)] (Ortony, Clore, and Foss(1987)の 情動研究材料語)	“一般的印象” のカテゴリー	“技巧的印象” のカテゴリー	Ortony, Clore, and Foss(1987)における カテゴリー
注意深い (careful) ー浅はかな (careless)	知的洗練性	知的洗練性	行動ー認知状況
とるに足らない (unimportant)	知的洗練性	知的洗練性	主観的評価
魅力的な (attractive) ー魅力的でない (unattractive)	知的洗練性	愉快性	主観的評価
感動的な (impressed)	知的洗練性	愉快性	認知状況
真面目な (earnest)	複雑性	知的洗練性	認知状況
しかんした (psychologically relaxed)	複雑性	知的洗練性	情動状態
しかんした (physically relaxed)	複雑性	知的洗練性	肉体的・身体的状況
動転した (upset)	わざとらしさ	的確性	情動状態
陽気な (cheerful, merry)	愉快性	愉快性	情動状態
愉快な (pleasure)	愉快性	愉快性	情動状態
攻撃的な (aggresive) ー防衛的な (defensive)	攻撃性	攻撃性	行動ー認知状況
風刺的な (sarcastic)	攻撃性	攻撃性	行動ー認知状況

[a)] 本研究において形容語尺度の両端をなしていたものどうしは対にして示した.

経験する情動に対応する単語を多く含んでいる．この意味で，「愉快性」は言葉の“あや”の印象の中の最も基本的な情動的側面を反映する形容語を含んでいるといえるかもしれない．

さらに，“一般的印象”の「攻撃性」のクラスターはOrtony, Clore, and Foss(1987)の「行動－認知状況」の一部に相当している．「行動－認知状況」は直接情動を指示しない単語からなり，それゆえ「攻撃性」が「行動－認知状況」と対応するとすれば，「攻撃性」を情動的側面とした先の解釈とは食い違うことになる．Ortony, Clore, and Foss(1987)は，情動研究材料語の中には，前後の文脈によって情動状況を指示したりしなかったりするものがあると指摘している．例えば，「客観的記述」の“abondoned”（表１を参照のこと）は“feel”と組み合わされ“feeling abondoned”のように用いられれば“諦めている”となり情動状況を指示するが，“be”とともに“being abondoned”と使われれば，“放棄している”となり情動状況を指示しなくなる．「行動－認知状況」の単語の中には，例えば「競争的な（competitive)」や「友好的（friendly）」のように，文脈と合わされると情動状況を指示するようになるものが多いように思われる．このことから推測するなら，「攻撃性」の形容語は，“あや”の情動的側面の中でも特に文や文章など，より大きな単位の表現を読んで得られる総合的な印象を表わしているのかもしれない．

“一般的印象”のクラスターのうち，Ortony, Clore, and Foss(1987)において情動状況を指示するとされたカテゴリーに該当する単語を含むものは，「愉快性」のみである．また，表２における対応から，「愉快性」は，情動状況だけを指示する「情動状態」と対応すると推測される．本研究の形容語中に，情動状況と同時に他の状況をも指示するカテゴリーにあてはまるものがないように見える理由は，たまたま本研究で用いられた形容語の中には情動を表わすものが少なく，逆にOrtony, Clore, and Foss(1987)では当然のことながら情動を指示する単語が多く含まれていたためであろう．

他方，“技巧的印象”とOrtony, Clore, and Foss(1987)のカテゴリーとの比較では，“技巧的印象”の「攻撃性」のクラスターがOrtony, Clore, and Foss(1987)の「行動－認知状況」の一部に相当していること以外には対応は見られない．この理由は，“技巧的印象”が表現形式そのものに注目した評定であったために，「情動状態」への直接的な指示の結果もたらされる印象と，情動以外の状況を指示し間接的に情動を喚起しもたらされる印象とが区別されにくくなり，その結果，後者に対しても前者と同じような評定結果が与えれられたためかもしれない．

本研究結果とOrtony, Clore, and Foss(1987)のカテゴリーとの比較から，言葉の“あや”の印象が，話者の多様かつ多層的な知的・理性的側面や情動的側面から成り立っていることを確認できたといえるであろう．人が“あや”のある表現を使う理由の一つは，このような多様で多層的な知的側面や情動を効果的に伝えることができるためであると考えられる．したがって，今後の研究課題として，このような複雑に絡み合う印象側面をいかに一つ一つ解きほぐし，明らかにして行くかということが挙げられるであろう．

“あや”の印象は，一単語から文章に至るまで，あらゆるレベルの表現の処理のプロセスにおいて生み出されるものであると考えられる．それゆえ，今後，どのような言語処理プロセスの中で“あや”の印象がもたらされるのかを子細に調べて行こうとするのであれば，対象とする表現のレベルを厳密に統制することが必要になろう．

引用文献

阿部純一（1987）．談話理解における“話者世界”の想定化について．心理学評論，30，263-275．

Anderberg, M. (1973). Cluster analysis for applications. New York: Academic Press. (Anderberg, M. (1988). 佐藤嗣司・江藤香 他（訳） 西田英郎（監訳）．クラスター分析とその応用 内田老鶴圃.)

Clark, H., & Clark, E. (1977). Psychology and language: An introduction to psycholiguistics. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc. (クラーク H.・クラーク E.（1986）．藤永保・小菅京子・酒井たか子・秦野悦子（訳）心理言語学 上下巻 新曜社.)

Harman, H. (1976). Modern factor analysis (3rd ed.). Chicago: University of Chicago Press.

Hilgard, E. (1980). The trilogy of mind: Cognition, affection, and conation. Journal of the History of the Behavioral Sciences, 16, 107-117.

金子康朗・佐山公一・阿部純一（1986）．修辞表現理解過程における“逸脱”の検出．(Hokkaido Behavioral Science Report, Series P, Suppl., No.45.)

桃内佳雄（1988）．文章の理解と生成について．北海道大学大型計算機センターニュース，20 70-78．

Ortony, Clore, & Foss (1987). The referential structure of the affective lexicon. Cognitive Science, 11, 341-364.

Sarle, W. S. (1985). VARCLUS Procedure. In S. Joyner (Ed.), SAS Institute Inc. SAS user's guide: statistics (5th ed.), pp. 801-823. Cary,N.C.: SAS Institute Inc..

佐藤信夫（1978）．レトリック感覚．講談社．

佐藤信夫（1981）．レトリック認識．講談社．

付録

実験で用いられた修辞的発話例を示す（反応用紙の不備のため分析から除外した一つの例は除く）．丸括弧内は，実験で被験者に与えられた発話例に対する説明を示す．発話例は著者別にまとめて示し，また，それらの原典は，各末尾の鍵括弧内に付されている．間接引用の原典は発話例ごとに二重鍵括弧内に示してある．

・キナリ　好きなり　春となり（キナリ：布地の名）
・めだつ　プリント　ぷりん，ぷりんと（水着の広告コピー文）
・酢豚つくりモリモリ食ったブス．
・軽い機敏な仔猫何匹いるか．
・渇きに．（清涼飲料水の広告コピー文）
・なにか，こう，ワイオミングの一夜って感じになってきたなあ．（キャンプ用品の広告コピー文）
・ふるえていては，愛は語れない．（コートの広告コピー文）
・太るのもいいかなあ，夏は．
［以上，土屋耕一（1984）．土屋耕一全仕事．マドラ出版より．］

・「近頃は，また短髪が流行りなんだってね．」「……」「若い人がジーパン離れしてきてるって話だねえ．」――「オジサン，何が言いたいの？」
・逢わぬ人とは，別離もない．
・微笑の法則
・「あのォ，これ，作ってみたんですけど．」（ジャムの広告コピー文）
［以上，糸井重里（1984）．糸井重里全仕事．マドラ出版より．］

・生きること……．結局それはできるだけ満足していられるように工夫することだ．
『F．サガン，ある微笑』
・人は旅をする．人は旅をして，ついにはわが家へもどる．人は生きる．人は生きて，ついには大地にもどる．
・虎は死して皮をのこし，人は死して名をのこす．
・墓場はいちばん安上がりの宿屋である．
・元始，女性は実に太陽であった．
・人間は一本の葦にすぎない．『パスカル，パンセ』
・友情は人生の酒である．

・負けの味というのは一生忘れない．
・結婚生活ーこのはげしい海原を乗り越えていく羅針盤はまだ発見されていない．
・「人生には予定表にない出来事がおこるんだなって…．」
・理屈が判っても，気持ちがおさまらんのだ，年寄りは．
［以上，現代言語セミナー(編)（1985）．スルドイ言葉の辞典　冬樹社．より］

・「なにいってやんでえ，いつおめえと酒を飲んだい？」「飲みましたよ．」「だからどこで？」
・「勘定かい，さあよろしい，心得たよ．」「ああさようですか．」「心得ているよ．」「へえではひとつおはらいねがいたいもんで……．」「だから心得ているといってるんだよ．」
・「あのねえさんには，こないだ観音さまで逢ったとき，たまにはお茶でも飲みにいらっしゃいなんていってたっけ…まんざら脈がなくもなかろう．」
・（うそつき弥次郎は仕事で冬の北海道へいってきた．宿であったことを話している．）「さむいから，お茶でも飲んであったまろうとおもって，お茶をたのむと，女中がお茶をおかじりなさいというんで…．」
・「せっかくまあ，縁あって親分子分の杯をいただいたんですから，あたしもこれからは，心をいれかえて，いっしょうけんめい悪事にはげみますから，どうかいままで通り置いて下さい．」「いや，おまえが，真人間に立ちかえって，あっぱれ泥棒稼業にはげむなら（以下省略）」
・「そのあとがまたいけないね．こんどは，みそこしへいくらかお銭を入れて，ガラガラふって，おとうふのおみおつけをこしらえたいんだけど，だれかおとうふを買ってきてくれないかしらとこういうんだ．（途中省略）だれかったってうちには猫とあたしだけしかいないんだよ．」
・（相手にとりいろうとしている）「へい，こんちわ，どうもごきげんよろしゅう，その節はとんだ失礼をいたしました．」「どうもその節は，またばかにめいていいたしました．」「なにいってやんでえ，いつおめえと酒を飲んだい？」
・「おれは四つ足ならなんでも食うぜといったら，おどろいたね，こたつやぐらを持ってきやがった．さあ，四つ足だから食えというから，おれも負けずにいってやった．おなじ四つ足でも，こういうあたるものは食わねえ．」
・「年がら年中その着物をきてる着たきりすずめじゃねえか．」
・「なんだ，そこにいるのならさっさと返事をしろ．まあ，こっちへはいれ．」「手がふさがってるだ．」「なにをしているんだ．」「ふところ手をしてるだ．」
・（熊公と彼のかみさんとの会話）「おまえさんが笑いながらあたしに教えたんだよ．」「しかとさようか．」「なにいってんだよ．そうだよ．」「それに相違ないか．」「ああ，相違

ないねえ．」「おかしいと申して笑う貴様がおかしいぞ．」
［以上，興津要(編)（1972）．古典落語．講談社より.］

・羅生門が，朱雀大路にある以上は，この男の他にも，雨やみをする市女笠や揉烏帽子がもう二三人はありそうなものである．『芥川龍之介，羅生門』
・「おっと今はねた鯉だが，やつは百五十万円の錦鯉だよ．（途中省略）ほかにも農林大臣賞や水産長官賞がぞろぞろ泳いでいるのだよ」『井上ひさし，ドン松五郎の生活』
・堅田の浮御堂に辿り着いたときは夕方で，その日一日時折思い出したように舞っていた白いものが，そのころから本調子になって間断なく濃い密度で空間を埋め始めた．
『井上靖，比良のシャクナゲ』
・巡査がおまえはなんだと云うと，（酔っぱらいは）呂律の回らない舌で，お，おれは人間だと威張ってゐる．『夏目漱石，永日小品　人間』
・法王ボニファキオ八世は，狐のようにその地位につき，獅子のようにその職務をおこない，犬のように死んだという．『モンテーニュ，エッセー』
・「笑いごとじゃないぞ」とウィングが言った．「笑う気はないさ」，シェーンはライターの火をつけた．「もっとも，だからと言って泣きたいとも思わんがね．」
『ブレッド・ハリディ，大いそぎの殺人』
・太郎の目の色がかすかにうごいて，笑のさざなみをふくんだやうであった．
・支配人は総金歯をにゅっとむいて笑ったので，あたりが黄金色に目映く輝いた．
『井上ひさし，モッキンポット師の後始末』
［以上，佐藤信夫（1978）．レトリック感覚．講談社より.］

・今夜，死ぬのだ．それまでの数時間を，私は幸福に使ひたかった．ごっとん，ごっとん，のろすぎる電車にゆられながら，暗鬱でもない，荒涼でもない，孤独の極でもない，ちえの果てでもない，狂乱でもない，阿呆感でもない，号泣でもない，悶々でもない，厳粛でもない，恐怖でもない，刑罰でもない，憤怒でもない，諦観でもない，秋涼でもない，平和でもない，後悔でもない，沈思でもない，打算でもない，愛でもない，救いでもない，言葉でもつてそんなに派手に誇示できる感情の看板は，ひとつも持ち合せてゐなかった．
『太宰治，狂言の神』
・波子の身の上相談も，愛の訴えに聞こえた．それだけの年月が，二人のあいだに流れていた．この年月は，二人のつながりでもあり，へだてでもあった．『川端康成，舞姫』
・「顔に泥ぬられたやて，えらいすまなんだな，立派な顔に泥塗って．洗うたるわな．」コンクリートの道に，顔そむける間もなく額をゴシゴシとすりつけられ，マンガはもう生きた心地なく，（以下省略）『野坂昭如，殺さないで』

[以上，佐藤信夫（1981）．レトリック認識．講談社より.]

・泣いてまでも頼んだ母の意見を振りきっていく娘に，かよは怒りと驚きを感じていた．かよはぎんが自分の娘であって娘でなくなっているのを知った．
[渡辺淳一（1975）．花埋み．新潮文庫より.]

・娘はこれだけは聞いておかなければならないというシンケンな顔付で尋ねた．
[室生犀星（1962）．杏っ子．新潮文庫より.]

・オリンピックに出場することを「ソウルを目指す」と言う場合．
・どの職場にもたいてい一人や二人与太郎はいるものだ．
・「決して満点のとれないような問題ではない．現にこのクラスの何人かは満点だ．」
・「…所詮，女は女なのさ」と言う場合．
・今の日本の人口は一億二千八十六万四千五百十九人だから，一人が一つの夢をもっているとすると，全部で一億二千八十六万四千五百十九個の夢があるなんて考えるとなんだか楽しくなってくる．
・実際には袖など濡れていないのに袖を濡らすと言う場合．
・タイガースにとってバースはまさに救世主であった．
・彼の言い方は断定的ではあるが，決して断定してはいなかった．
・ピリッときいた新鮮なわさびはお涙ちょうだいの食べ物だ．
[以上，自作.]

Abstract

Impressions of figurative speech: A classification of adjectives expressing the figurativeness of utterances.

Kohichi Sayama

(Department of Behavioral Science, Hokkaido University)

The present paper investigated the question of what makes up an impression of "figurative" speech. Twenty-two subjects read figurative expressions and rated their figurativeness on 50 adjective scales under two conditions. Condition 1 required subjects to rate figurative expressions using simple and direct impressions. Condition 2 required subjects to respond to figurative expressions paying attention to surface forms of the expressions. Results indicated that impressions of figurative speech include both an intellectual or rational aspect and an affective aspect. They also suggest that both aspects consist of 3 or 4 components.